O1-42

高次脳機能障害患者の排尿の自立とADL拡大に伴う動作の安全

自動車事故対策機構 千葉療護センター 看護部

○政野 康一

【はじめに】患者にとって安全な環境を整えることは看護の基本でもある。回復期の患者において、転倒転落の防止を図りながら患者の可能性を最大限に引き出す援助が必要である。今回、左半身不全麻痺、神経因性膀胱、高次脳機能障害を持つ回復期の患者を担当し、ADL拡大に伴う転倒転落の防止について注目し、検討した。

【事例】A氏、45歳、男性、交通事故による重度頭部外傷10カ月後の入院。退院まで1年2か月を要した。頭部CT所見では前頭葉に脳挫傷がみられ、自発性の低下が顕著で、尿便意は不明確の状態であった。

【看護目標】安全に配慮しながら排尿の自立とADL拡大を図ることを目標に挙げ、ベット・車椅子乗車・T字杖歩行・トイレ動作における転倒転落の防止とした。

【結果】尿便意が明確になり、一人でトイレに向かうようになるに従い、安全面の配慮が必要となった。ナースコールの代わりに鈴や携帯用ブザーの使用を試みたが、意識付けは出来なかった。車椅子乗車では、本人と家族に同意を得て股ベルトを使用したが、自分で外せるようになった。臥床時には転落防止マットを設置した。A氏の排尿パターンが確立されてきたことで、A氏の行動を予測して関われるようになった。抗痙攣薬の内服を中止し、シンメトレルの内服を開始後、自発性が改善され、トイレの単独歩行や自ら新聞や雑誌を見るなどの行動がみられた。そして、ADLが全般的に拡大した。日中は車椅子生活から椅子とT字杖歩行の生活に変更した。

【まとめ】本事例では、患者の行動を予測して関わること、状態変化を早期に察知し転倒転落の防止策について速やかに立案し実践することが重要であることを確認できた。